

4 べくべからべくべかりべしべきべけれ

短歌は、一般的にどれだけ歌に自分の気持ちを表現できるかが重要視されます。たとえば、大西民子は帰らない夫を待ち続けた気持ちを、

「かたはらにおく幻の椅子一つあくがれて待つ夜もなし今は」
 (『まぼろしの椅子』より) とストレートに詠んでいます。それに対して永井は、自身の心情をあえて歌にしませんでした。これは私生活を詠むよりも、歌で物語のような世界を描いてみたいと考えていたことが影響しています。

永井は歌のリズムを重要視していました。今回展示している
 「べくべからべくべかりべしべきべけれすずかけ並木来る鼓笛隊」(No.17) は、その代表的作品とも言われています。

また、永井の歌は、31文字の定型に拘らないものも多くあります。
 「ガラス戸にゆふぐれあかねぐも銀の雲流し筆屋は本日休業」は、音の響きを巧みに利用し、情景を鮮やかに描き出しています。



自筆色紙「べくべからべくべかりべしべきべけれ
 すずかけ並木来る鼓笛隊」(No.17)

参考文献

『モモタロウは泣かない』永井陽子/著 ながらみ書房 2002年、『永井陽子全歌集』永井陽子/著 桐葉書房 2005年、
 『現代短歌の鑑賞事典』馬場あき子/監 東京堂出版 2006年、
 『歌の架橋-インタビュー集[1]』久々湊盈子/著 砂子屋書房 2009年、『現代秀歌』永田和宏/著 岩波書店 2014年
 「短歌」1971年8月号、「歌壇」1991年11月号、「歌壇」1992年6月号、「短歌」2003年8月号、「短歌」2014年5月号

2021.3.5 発行

さいたま市立大宮図書館

さいたま市大宮区吉敷町 1-124-1

電話 048-643-3701

企画展

歌人・永井陽子

「うたはふしぎな楽器」



2021年3月5日(金)～5月6日(木)

1	雑誌	「短歌人」昭和44年8月号
2	文芸誌	「轍」第5号(愛知県立女子短期大学、文芸同好会誌)
3	書籍	「太陽の朝餉を受けて耳元にふとにおう血を青春という」 (「短歌」昭和46年6月号より)
4	書籍	句歌集『葦牙』
5	同人誌	「詩線」終刊号
6	書籍	『樟の木のうた』
7	自筆色紙	「ガラス戸にゆふあかねぐも銀の雲流し筆屋は本日休業」
8	所持品	赤間硯、筆
9	自筆原稿	「枕辺へながれてきたるはなびらをちひさな春のつばさとおもふ」
10	自筆原稿	「パタンピチンブツンペテンのその次は……雨が降り出し授業を終へる」
11	書籍	「されど楽器は天与のものと言ひ放ち酔つばらひのクラリネット吹きも友人」 (『ふしぎな楽器』より)
12	書籍	『モーツァルトクラリネット協奏曲イ長調 k.622』
13	書籍	『モーツァルト クラリネット五重奏曲 イ長調』
14	書籍	『モーツァルトの電話帳』
15	所蔵品	ファクシミリコードレス電話機
16	書籍	『小さなヴァイオリンが欲しくて』
17	自筆色紙	「べくべからべくべかりべしべきべけれすずかけ並木来る鼓笛隊」

所蔵は全て大宮図書館です

※永井陽子氏に関する資料は、旧大宮市で構想されていた(仮称)大宮文学館のため、
 永井陽子氏没後にご遺族から寄贈していただいたものです。

永井陽子の歌集



写真提供:角川文化振興財団「短歌」編集部

- ① 句歌集『葦牙』
(1973年、愛知県立女子短期大学文芸部)
- ② 『なよたけ拾遺』(1978年、短歌人会)
- ③ 『樟の木のうた』(1983年、短歌新聞社)
- ④ 『ふしぎな楽器』(1986年、沖積舎)
- ⑤ 『モーツァルトの電話帳』
(1993年、河出書房新社)
- ⑥ 『てまり唄』(1995年、砂子屋書房)
- ⑦ 『小さなヴァイオリンが欲しくて』
(2000年、砂子屋書房)

1 めぶき

『葦牙』

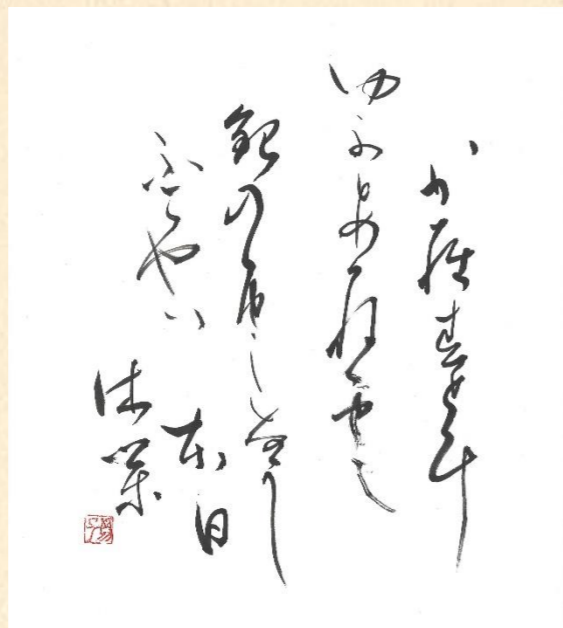
永井陽子は、1951(昭和26)年、愛知県瀬戸市に生まれました。県立瀬戸高校に入学したころから短歌の創作活動に興味を持ち、短歌結社「短歌人会」に入会します。同じ心を惹かれた日本の古典文学は、

「いつの世の昔語りの竹の里をさなきひとのまみに照る月」
(『なよたけ拾遺』より)のように、永井の歌に影響を与えています。

永井が愛知県立女子短期大学在学中に、“太陽の朝餉”と題して投稿した50首が「角川短歌賞」候補に選ばれます。受賞には及ばなかったものの、伸び伸びした歌は選者から注目を集めました。卒業後、「短歌人新人賞」を受賞し、句歌集『葦牙』を刊行します。そのあとがきで、「青春を託せるものは短歌しかなく、短歌は自分を手招いている」と書いています。



句歌集『葦牙』(No.4)



自筆色紙「ガラス戸にゆふあかねぐも銀の雲
流し筆屋は本日休業」(No.7)

2 わかば

『なよたけ拾遺』 『樟の木のうた』 『ふしぎな楽器』

1974(昭和49)年、永井は愛知県立芸術大学音楽部の職員として働き始めます。この頃、同じ短大出身の友人と同人誌「詩線」を発行し、自分の歌やエッセイを発表しました。また、竹取物語をテーマにした劇団四季の舞台「なよたけ」に触発された永井は、第二歌集『なよたけ拾遺』を刊行します。この歌集は、「第4回現代歌人集会賞」を受賞することになります。

1981(昭和56)年、永井は愛知県立図書館へ異動になり、その後10年余りを図書館職員として働くことになりました。後年のエッセイで、「司書としての仕事は実に楽しく、やりがいを感じていた」と書いています。

図書館勤務時代には、近くの神社にあった樟の木に想いを馳せた第三歌集『樟の木のうた』や、「三十一音の短歌形式は、実にふしぎな楽器である」という考えそのままに第四歌集『ふしぎな楽器』を刊行しています。

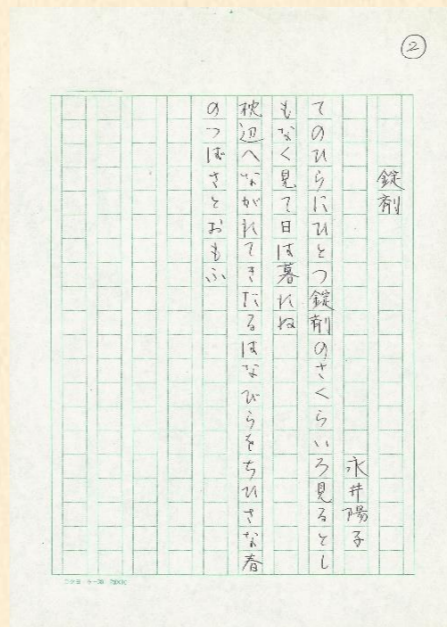
3 あおば

『モーツァルトの電話帳』 『てまり唄』 『小さなヴァイオリンが欲しくて』

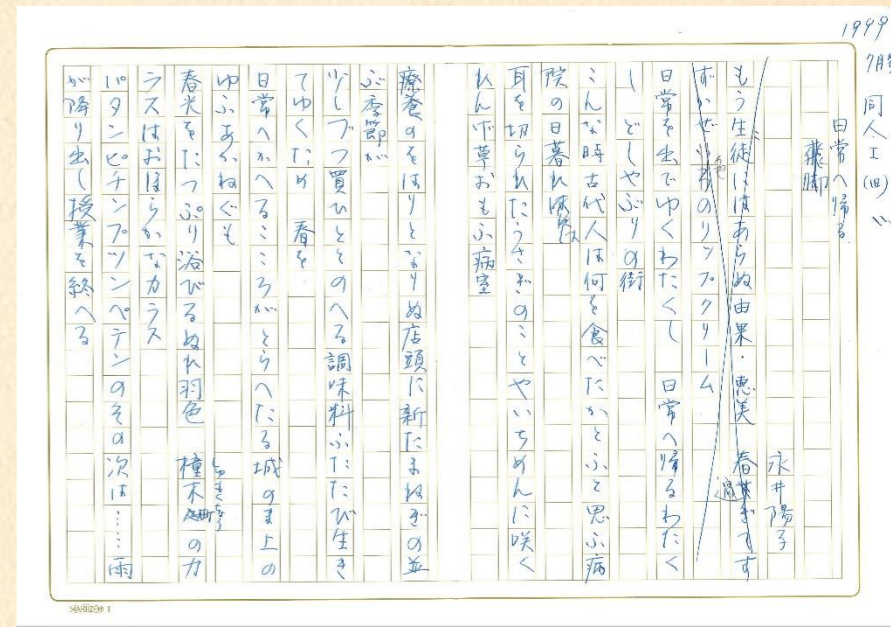
図書館から愛知県立大学外国語学部に異動になった永井は、1993(平成5)年に、第五歌集『モーツァルトの電話帳』を刊行しました。モーツァルトの音楽をこよなく愛した永井は、「クラリネット協奏曲」のポケットスコアをはじめ楽譜にまつわるさまざまな資料を残しています。また、モーツァルト作曲のオペラ「魔笛」を見て、「いつかあの音楽を短歌で表現してみたいと思っているが、一度も書けたことはない」とエッセイに書いています。

1995(平成7)年、愛知芸術文化センターを退職した永井は、愛知文教女子短期大学の助教授となり、中世和歌の研究を専門としながら国語表現法などの講義を担当しました。同年、第六歌集『てまり唄』を刊行します。

更なる活躍を期待されていた永井ですが、次第に体調を崩しがちになり、2000(平成12)年の1月26日、48歳という若さで亡くなりました。同年に追悼歌集『小さなヴァイオリンが欲しくて』が刊行されました。



自筆原稿「枕辺へながれてきたるはなびらを
ちひさな春のつばさとおもふ」(No.9)



自筆原稿「パタンピチンツツンペテンのその次は……
雨が降り出し授業を終へる」(No.10)